

## ＝ヒューマンケア通信 発行2周年＝

本日で、ヒューマンケア通信を始めて、2年を経過しました。最初のテーマは高齢者医療制度でした。今や、何ら報道もされず関心も呼ばない後期高齢者医療制度の見直し議論ですが、お陰様で、通信を2年間、書き続けることで、自分のものを見る目のレベルは、少なくとも落とさずに本日を迎えられたようです。今回は、この1年を振り返りつつ、書こうと思って書けなかった、北朝鮮拉致被害者帰国支援の話に触れたいと思います。

### <この1年のヒューマンケア通信を振り返る>

1年目は21回の発信でしたが、2年目は、1回多い22回の発信となりました。

テーマも、分野別では医療関係が5割、介護・障害関係が3割、その他が2割と、1年目より介護・障害関係がわずかに増えただけで大きな変化はありませんが、1年目は制度論が多かったのですが、2年目は事業的な話が半数に増えるという点で特徴が出ました。

「どんな制度になっても、最も大事なものは、そこで仕事をする事業者の質」という自分自身の考えが強くなってきたことと、福井で、「障害事業を創業支援する」という自分にとっても初めての取り組みが面白く感じる事が反映されているものと思います。

制度づくりは、政党が相手ですが、事業づくりは、現実の人を相手にし、その変化を直接見ることができるのが面白い点です。

また、本田さん(日本年金機構財務部長)からいただいた書評に関するやりとりは、自分なりに面白かったと感じています。

こうした、ご意見や批判をいただくと自分の考えが深まるのがよくわかります。

No	年月日	タイトル
22	2011年11月1日	ヒューマンケア通信発行1周年
23	2011年11月15日	過度な行政のリスク管理は何をもたらすのか?
24	2011年12月1日	TPP交渉参加の騒動は何だったのか?
25	2011年12月15日	医療機関の経営状況をどう考えるか
	2012年1月1日	<お休み>
26	2012年1月15日	平成24年度政府予算案と社会保障・税の一体改革
27	2012年2月1日	国の福祉・介護職員の処遇改善策は有効なのか
28	2012年2月15日	障害サービスの平成24年度報酬改定を考える
29	2012年3月1日	診療報酬・介護報酬の平成24年度同時改定を考える
30	2012年3月15日	病院事業における看護職の採用と育成
31	2012年4月1日	心身喪失者等医療観察法を知っていますか
32	2012年4月15日	産業政策の視点からの薬価政策議論を期待
33	2012年5月1日	社会福祉法人を会社にする(地域振興の視点からの医療・福祉)
34	2012年5月15日	真心絶品Cネット関東店のその後(地域振興の視点からの医療・福祉)
35	2012年6月1日	面白い存在 くじらホスピタル(地域振興の視点からの医療・福祉)
36	2012年6月15日	地域振興として医療・福祉事業に期待するもの
37	2012年7月1日	普通にやれば制度ビジネスは大幅黒字
	2012年7月15日	<お休み>
38	2012年8月1日	新たな医療保険者のあり方(職域・地域の二本立てをどうするか)
39	2012年8月15日	身近なところで医療を受けたい・利用者の意識は変わるか
40	2012年9月1日	医療サービス提供主体に必要とされる資質とその指標
41	2012年9月15日	次世代の医療・福祉事業の経営者をどのように育むのか
42	2012年10月1日	国立病院機構の平成23年度決算を読み解く(その1)
43	2012年10月15日	国立病院機構の平成23年度決算を読み解く(その2)

また、当初は20名程度の方を対象に始めましたが、現在の登録者数は120名程度まで増えました。

なかには、通信のコピーを見たという方から直接電話があったり、どなたかから面白いと言われて直接電話があったりと、ハプニングもありましたが、徐々にメンバーも増えてきました。

登録者の構成としては、行政・学者・マスコミ関係、医療関係が各3割で、企業関係が2割、福祉関係が1.5割というのが現状です。今後どうなっていくかは、全くわかりませんが、こうしたネットワークが、次の時代につながると良いな...とは思っています。

なお、先日、通信の配信の案内の際に、メール操作を誤り、皆さんのアドレスが配信者に見えるという失敗をしてしまいました。何か問題が起きるか心配していましたが、大きな問題はなかったようです。

こうしたミスをしたこととお詫び申し上げつつ、そうした問題とは無縁の皆様と知り合えたことを喜んでます。

これからの1年は、新しい原則(5回書いたら1回休むなど)で進めますので、また、よろしく願います。

さて、今回は、先月で10年を迎えた北朝鮮拉致被害者5名の帰国にまつわる話です。

## <北朝鮮拉致被害者の帰国支援の仕事に携わる>

10年前の10月15日に、北朝鮮拉致被害者の5名・蓮池ご夫妻、地村ご夫妻、そして曾我さんが、政府専用機で羽田空港に降り立ち、赤坂プリンスホテル(当時)で記者会見を行いました。報道陣は数百人。山口百恵さんの引退会見以来の大規模な記者会見だと、当時のホテル担当者から、現地で、直接、聞いたことを覚えています。

翌日、私は、帰国者に地元へ戻る経路・体制などを簡単に説明する場を設け、佐渡に移動しました。。。

当時、拉致被害者の帰国支援の責任者は、内閣官房副長官の安部氏でした。

表舞台では、様々なことが報道され、ある意味、お祝いムードでしたが、その水面下では、強い政治的な意思と大変な作業量があったというのが実感です。

5人の帰国の前提として、小泉総理(当時)と金主席(当時)のトップ会談が行われ、何名かが一時帰国すると報道がなされたときは、私は、もちろん自分が関わることなど、想像もせず、新しい高齢者医療制度をどう世の中に問うかを若手補佐等と検討していました。

しかし、帰国が決まってから、サポートする体制として、中山恭子内閣官房参与、齋木昭隆外務省アジア大洋州局審議官と錚々たる顔ぶれの中、中山参与のたつての依頼で、厚生労働省も国内支援班として参加することに・・・

いつも通りお役所に出勤すると、保険局長から呼ばれ、いつもとは違う不機嫌そうな顔で、「絨毯部屋の〇〇さんの所に行ってくれ」と言われ、その部屋に出頭すると、「本日、午後から重要な会議があるので行ってくれ」との由。

事情もわからないまま、指定された場所に行くと、齋木審議官や各省庁の人が集まっており、よくよく聞くと、拉致被害者の帰国支援をするチームの会議とのこと。そこで初めて、自分が、数日後に帰国する5名の拉致被害者の方が地元へ戻ることを支援する責任者であることを知りました。

会議終了後、事情がわからないので、絨毯部屋に会議結果を報告すると、「地元へは外務省が行く。君らは地元に行く必要はない。東京で連絡調整をすればよい。1週間と聞いている。」と言われ、ついでに人事課長に回って、「何で私なのですか？」と問うと、「中国経験、福井県出身(地村夫妻)」と理由にならないことを言われ、加えて「即戦力」と。

「即戦力」は、半年前に、前の人事課長から3回目の保険局勤務の理由を聞いた際の回答と同じ。あきれて、保険局長に、「半年で、2回も即戦力と人事課に言われました。」と伝えると、「こちらの仕事も停滞するのだが、同情するよ」と慰められての帰国支援チームへの参戦です。

翌日から、同じく厚労省から派遣される2名と仕事を始めましたが、外務省の帰国支援のロジの責任者(在韓国大使館の参事官?)に状況を確認すると・・・正式の帰国日時がわからない、地元へ移動する日がわからない、地元へ帰る経路も決まっていない、地元へ誰が同行するかもわからない、地元へ帰って何をすることも決まっていない、地元移動・地元活動の費用は誰が負担するかもわからない、支援するにも厚労省が出した人間は私を含めて3人で手が足りない、最も問題なのは一時帰国とされ、いつまでとなるかがわからない・・・

ない・ない・ない づくしで始まった1日でした。

加えて、中山参与からは、「外務省の人がリエゾンで被害者に付いていきますが、心配なので、そちらで万全の態勢をとってください」と言われ、話がちがうと・・・最初から混乱状態に。それでも、齋木審議官からは、「〇日には、安部副長官と会うので、それまでに、地元へ戻る段取りを報告できるようにして欲しい。国内のことはわからないので、よろしく願います。」と任されて、逃げ出すわけにも行かず・・・

また報告と、厚労省の絨毯部屋の住人に会いに戻りましたが、「君に任せる」というだけで何ら指示もなく・・・他の2人の手前、手ぶらで帰る訳にもいかず、官房総務課に回って、何はともあれ自由になる資金の確保と、当時はまだ認められていた「原稿料」から、一定金額の提供の約束をとりつけ、初の「ない」が「ある」に・・・

ホテル内のロジ室で、総勢100人近い規模の人員を投入する軍隊並みの外務省に対し、たった3名の竹槍部隊での作業開始です。3人の役割分担を概ね決めて、順次、被害者が地元へ無事たどり着く道を作っていました。

地元へ戻る日を帰国の翌々日に確定、地元へ戻る経路の調整、地元移動中に生ずるトラブルを避けるため警護官・鉄道警察との調整、地元へ同行するメンバーの確定、各ポイントで生じる報道撮影等の調整など、書くとは簡単そうですが、時間もない中、3人とも、ほぼ徹夜で、概ね2日にて、これを終え、齋木審議官に結果報告。

これで、終了と思いきや、「じゃあ一緒に官邸に行つて報告しよう」と、そのまま真新しい首相官邸に同行し、安部副長官との会議に参加することに。

### <安部副長官の強い意志を感じる>

当時、安部副長官は48歳。今の私より若く、発言の端々に本件に関する強い意志が見受けられました。

齋木審議官から、ピョンヤン～羽田のロジを報告し、当方から地元へのロジを報告。

恐る恐る最も大事なポイントである「いつまでか・・・」を切り出すと、「一時帰国と報道されているが、やっと拉致された方が帰国したのに、また、その国に送り返すようなことができると思うか。その件は、我々政治家が決めるから、君たちは、それが決まるまで、全力で、地元で支援をしてくれ。」と、5人の帰国前に指示がありました。

これは長期戦になるなと思いつつも、ロジ室に帰り、「地元に行くは必要ない」との厚労省幹部の指示を無視して、3人で相談し、「地元へ先乗りして受入自治体の支援を行い、長期的にも対応できるようにしよう」と方針を決めました。

しかし、3人とも地元に行くと、東京での支援体制がなくなるので、最も受け入れがしっかりしていると見た福井については、外務省の力を借りることにし、ホテルでの記者会見の翌日午前、帰国者に対して、今後の手順を説明した上で、厚労省に報告することもなく(しても時間の無駄という判断)、そのまま地元支援に移動。

私が行ったのは、地元も家族の力も、最も弱いと見た佐渡であり、着いたその日から、マスコミ対応に不慣れな町役場の人と、情報がなく不満を抱え怒り気味のマスコミ関係者を相手に、徹夜同然の始まりです。

町役場の人は、「なぜ、こんな目にあうのか」と弱音を吐くので、「皆さん これは災害とってください。ほっておけば、マスコミで街が壊れます。皆さんがやらないで誰がやるのですか・・・」と励ますことから。

曾我さんの佐渡到着日の明け方に、やっと関係者の役割と段取りが決まり、それぞれが現場に・・・

出発点の東京駅では、200人を超える報道陣がホームに集まったと聞き、これは大変なことになると思いましたが、何とか、夕刻の曾我さんの地元での会見・父親との再会を終えて初日の旅程は無事終了。しかし、再会の時に披露された鬼太鼓(写真)の幽玄さに、感慨に浸る暇もなく、翌日の役割と段取りの会議を始め、深夜～未明に資料ができて、朝からそれぞれが現場に・・・

それでも、少しずつですが、毎日、準備の会議が終わるのが早くなり、メンバーの一体感も強まってきました。皆、疲れも溜まっていたましたが、地元が、毎日TVで報道されるのも楽しみになっていました。

曾我さんが神社参拝の際に、昔の着物を着て出たときなどは、報道陣からもどよめきが出て、役場関係者は、「やった！」という感じが出ていたものです。



さて、1週間ほどして、安部副長官が被害者の帰宅先を、それぞれ訪問され、佐渡にも来られました。

その時、相手はわかりませんが、政治家と思われる相手と「どうするか」を携帯で強い調子で話をされ、電話を切った後、「決まった。このまま地元に残る。」と、副長官が一言。これで、今後の方針が決まりました。

本人の意向確認という手順を経て、表に出るのは少し先になりましたが、地元に残ることが決まれば、後は、地元でマスコミ対応を自立してやってもらうしかないのので、この1週間私の右腕として働いてもらった20歳台の広報担当者に、その日から会議進行を任せ、私抜きで準備会議をやってもらうことに。

初日はダメでしたが、2日目にはうまく行きました。それを見届け、事情を助役に話をして、「私は東京に戻るが、引き続き、支援できるので、頑張ってもらいたい」とお願いし、佐渡を引き上げました。その後、何回か、地元の20歳台の広報担当に連絡し、精神的な支援だけで済みました。

ロジ室に状況を報告した上で、外務省のロジ責任者と相談し、一時帰国でないのであれば、今の臨時的な体制を続けるのは無理なので、恒常的な支援組織を作ろうと合意し、旧自治省の方をヘッドとする枠組み案を「勝手に」作り、官邸に持って行ってもらいました。

当然、すぐに案は採用され、新体制への移行が決定し、私は厚労省に戻り、新たな高齢者医療制度の検討の場に戻ることに。ちなみに当初調達した資金は底をついていました。

数か月後、助役から、一通の御礼の手紙と地元の名産を送っていただきました。

これが私への唯一のご褒美でした。やって良かったと その時 つくづく思いました。

## <その後の10年と、これから10年をどう見るか>

こうした経験を経ると、どうしても拉致被害者に係る進展が気になるものです。

先月の報道では、あれから進んでいない(実際は曾我さんの夫の帰国はありました)、それは方法論が違っていた等の基調がありますが、どうしたら進んでいたか・・・極めて難しい問題です。

中国で大使館勤務をしていた時代、東北3省の外事弁公室(地方行政機関の外交部門)の人と、よく会う機会がありました。夜の会合などで、率直に、国境を接している北朝鮮のことを聞くと、明らかに近親感を持っている人はなく、少なくとも同じように思われるのは嫌で、現在の片務的な貿易は辞めたいと言う人までいました。

多くの日本人が思っているように、決して、中国は、北朝鮮を支持している訳ではなく、どちらかと言えば、扱いに困っているという状態でした。

こうした状況下で言えば、北朝鮮に圧力をかけるという方法＝これにより譲歩を引き出すという戦術は、個人的には間違っていなかったのだと思います。もちろん、この方法は、拉致被害者の家族も求めたのですから、今更、方法が違っていたというもおかしなものです。

ただ、この方法論は、北朝鮮側では金主席の健康問題等に起因する国内権力の低下が生じ、日本側では小泉首相後の毎年の総理交代によって日本への国際的な信頼が低下したことが、大きく影響を受けたと思います。

北朝鮮では譲歩することができる人がいなくなり、原則論を言うしかなくなった・・・

日本側では短期間の交代で「圧力と対話」という、後者の戦略を考え行動する時間がなくなった・・・

こうした、両国の政治中枢の弱体化の中で、拉致問題は事実上フリーズしたのだと思います。さて、これをどのように動かすかと言えば、

北朝鮮側は新体制になり、徐々に、国内の権力基盤を固めて、交渉できる状態は整いつつあるように見えます。

一方、日本は・・・

今のところ、外国と忍耐と寛容の粘り強い交渉ができるような政府・与党の状況には見えません。正直、北朝鮮は、今の日本を相手に交渉しても意味はないと考えるでしょうし、仮に交渉がまとまっても、それを日本が実行できるかも疑っていることでしょう。誰が、本当に日本を代表しているか、それが続くのかも、わからないからです。

これは、15年前に、中国勤務時代に、中国の日本専門家から教えてもらったことです。「日本をこれから担う政治家は誰ですか？これがはっきりしないと誰も日本とは付き合わなくなります。政治や外交はシステムが行うのではなく、最後は個人が行うものです。個人の顔が見えない日本は付き合いにくいです。」との言葉でした。

日本国内で、できもしないこと・やる気もないことを「羅列した文章」で、政党を選ぶ選挙を行い、政党内の都合で毎年のように党首を変えるような政治を続ける限り、残念ながら、アジア近隣諸国に、日本が信頼するに値する交渉相手と認められることはないでしょう。信頼されるのは、日本人のまじめさといった、あくまで個人ベースのものだけになってしまいます。

拉致問題の停滞が示すのは、今の日本が交渉するに足る信頼できる相手なのかどうか・・・という点に尽きているように思います。私個人は、政党の質に依拠する議員内閣制は、日本では、未来にわたり機能するとは思えず、政党の役割を小さくした首相公選制といった政治システムのほうが、いまより、安定した政治になるのではないかと考えていますが・・・実現性はゼロです。

そんなことを進める政治家が多数を占めることもなく、もし、多数を占めれば、あえてやる必要もないからです。

さて、最後は、政治への愚痴になりましたが、少なくとも、忙しい日々の続いた役所時代ですが、拉致被害者支援は、最も、濃密で、いや嵐のような2週間だったと記憶しています。

その2週間の中で、安部副長官(当時)の強い意志に触れることができ、その舞台裏の一翼を担えたのは、今では、良い思い出です。

安部氏の2回目の自民党総裁。どうなるかは、わかりませんが、当時のような強い意志を、何事にも貫いてもらいたいと思うばかりです。

ヒューマンケア・システム研究所 代表 北川博一